優秀賞

真実の重み

山口県　猶　希世子

小児病棟のベッドでいつものように目覚めた娘は、隣の部屋にいた友だちがいなくなっていることに気づいた。

「久美ちゃんは？」

「昨日の夜、急に他の病院へ移ったんよ」と、とっさに嘘をついた。また別の日に、朝になると病棟仲間が突然いなくなることが続いた。再び苦しい嘘をつこうとすると、

「夜、誰かのお母さんの泣き声が聞こえたけど」と、娘は何か気づいている様子だったが、それ以上敢えて聞こうとはしなかった。子どもなりに、気を遣っていたのかもしれない。

三十年前、小児がん病棟では元気になって退院できる子は少なかった。「白血病」という病名さえ子どもに伝えず、その日一日を楽しく過ごさせるよう明るく振る舞っている親が多かった。ただ、さすがに小学校高学年にもなると、突然友だちがいなくなる理由を伝える言葉に窮した。まして、骨髄移植を受けるには、子どもの「治りたい」という強い意志がなければ、無菌室での辛い治療にたった一人で何十日も耐えられないと思った。

主治医が絵本を紹介してくださった。森で一緒に暮らしていたアナグマが死んでしまい、最初は皆が悲しむ。しかし、アナグマが一人ひとりに残してくれた知恵や工夫の豊かさに気づき、悲しみが消えていく話だった。同じ病棟で治療している仲間は、子どもたちにとってかけがえのない存在だ。どの子も自分の「生」を一生懸命生きている。子ども同士で辛い治療を励まし合っている姿もある。そんな真剣な毎日の中で、大人も面と向かって正直に話したいと思った。亡くなった子どもたちが限られた生命の中で、一生懸命生きたことを称える言葉を持ちたいと思った。

主治医と絵本に勇気づけられた私は、自分の娘だけでなく、一緒に治療を受けている子どもたちにエールを送った。多くの人のおかげで、娘はドナーの方から新しい生命をいただき、三人の姉弟との生活を再開できた。